

小さなパン屋さん

はじめに

この小さなパン屋さんは、事務仕事をバリバリやっていた、主人公のヨータンが、生まれて初めて製造業にたずさわり、成長していく姿を、童話のように書き現わした物語です。

世界平和の祈りを祈りながら、神様に近付いていく姿を、明るく、無邪気に、天真爛漫な主人公をとおして、勇気を起こして、明るく生きるすべを、感じていただけたら、うれしく思います。だれでも、みんな、神様なのです。

でも、だれも、その事を知りません。

自分は、神様なんだと知っているヨータンは、人も神様なんだとちゃんと知っているのです。

改めて、この作品を読むと、主人公が本当に神様を現わしているなあと感じます。

その時は、必至で仕事をしていて、気がつかなかったのですが、我ながら、素晴らしい、見習わなくちゃ！ と思ってしまうのです。

小さなパン屋さん

第1話

ヨータンのひみつ

町の通りのかどっこに、小さなパン屋さんがありました。

この小さなパン屋さんには、10人の神様がおいしいパンを作っていました。

おっとりやのオトーさんは、このパン屋の責任者です。

しっかり者のオカーさんは、オトーさんとパン屋を支えています。

のっぽのノッピーと、おいしいパンのようにふっくらとしたポッカーは、オトーさんといっしょに、おいしいパンを作っています。

てきぱきとして働いているマルタさんは、長い間このパン屋さんで働く、ベテランおばさんです。

サンドイッチを作っているのは、すらりとしたハニーと、にこやかなヤッシー、そして最近ここで働くようになった、おっちょこちょいでドジなヨータンです。

お店でお客様にパンを売るのは、やさしいおねえさんのヨシエさん。

そして、おいしいパンをもっとおいしく見えるように、パンにお化粧をしているのが、ちょっとのんびりしているノムノムさんです。

この10人が小さなパン屋さんで働く神様たちです。

この小さなパン屋さんは、焼きたてのおいしいパンが、次から次へとお店に並んでいくのですが、次から次へと売れていく、とてもいそがしいお店なのです。

次から次へと、次々に並んでいくパンの種類は100種類以上もあって、

おっちょこちょいでドジなヨータンは、まだパンの名前も値段も全部覚えられません。

ヨータンはサンドイッチを作るのが仕事なのですが、・・・

サンドイッチを作っても、袋に入れようとすると、「あっ！」

パンの間にはさまっているレタスが飛び出して落ちてしまいました。

ようやく袋におさまったサンドイッチを、にんまりと台に置くと、「あっ」

三角にスックと立つはずのサンドイッチの袋が、パタンと横にたおれてしまいました。

何度やっても、袋は横にたおれてしまいます。

オカーさんは、それをはらはらしながら見ていましたが、たまらなくなって、声をかけました。

「ヨータン、パンが倒れないように、袋に入れてちょうだい」

「はい」

とヨータンは言いましたが、どうやったらパンがたおれないようになるのか、わかりません。

たおれる日もあれば、そうでない日もあるのです。

ハニーは、なれた手つきでサンドイッチを袋に入れていきます。

『ハニーのつくるサンドイッチはきれいだな』

『どうしたらあんなふうに、きれいなサンドイッチがつかれるのかなあ』

ヨータンは、きれいにすました顔で袋に入っている、ハニーの作ったサンドイッチをながめま
す。

「ヨータンもっと速く袋に入れてちょうだい」

もたもたしているヨータンに、オカーさんが声をかけました。

「はいっ」

また言われてしまいました。

ヨータンは、このパン屋さんに来てからずうっと毎日この調子で、オカーさんに注意されてば
かり。

もう一ヶ月以上にもなるのに、ヨータンのサンドイッチ作りは、なかなかじょうずにならない
のです。

『私って、何をやってもだめだなあ。』

ヨータンがそう思ったとたんに

（何をやってもだめな子だねえ）

（のろのろしてちゃだめだよ）

（覚えの悪い子だねえ）

昔、頭の上のほうからいつも言われていた言葉が、泉のようにわいてきました。

『ちがうっ!』

ヨータンの心が、大きな声を出しました。

『ヨータンは昔のヨータンじゃないもん。』

ヨータンは、神様なんだ。神様のヨータンはそうじゃないもん。』

ヨータンは、泉のようにわいてきた言葉を打ち消すかのように、心の中でこう唱えました。

『我即神也 我即神也 我即神也 我即神也 我即神也 我即神也』

そう、ヨータンは昔のヨータンではないのです。

ヨータンは、パン屋さんにきてからは、パンと仲良くなるために「パンさんありがとう」と心の中で言い続けています。

ヨータンは毎日「世界人類が平和でありますように」と祈っています。

毎日歩きながら「人類即神也」と唱えています。

太陽がにっこり微笑むと、「太陽さんありがとう」とお礼を言っている神様なのです。

そしてヨータンは、自分が神様だということを知っているのです。

でも、それを知っているのは、じつはヨータンだけなのです。

つづく

小さなパン屋さん

第2話

業が消えればみんな神様

町の通りのかどっこに、小さなパン屋さんがありました。

このパン屋さんには、10人の神様がおいしいパンを作っていました。

でも、みんなは自分が神様だということを知らないのです。

ただひとり、おっちょこちょいでドジなヨータンだけが、そのことを知っているのです。

「ヨータン、レタス入れすぎよ。

それじゃあお客様、食べにくいわよ」

「ヨータンのレタス白いのばかりね、緑のも使ってちょうだい」

きょうもヨータンは、オカーさんに注意されています。

「ヨータン、ツナはもっと入れてちょうだい」

ヨータンは、レタスも、ツナも、卵もどれだけパンにはさめばいいのか、まだわからないのです。

もたもたしていると、またオカーさんに、おこごとを言われてしまいます。

でもヨータンは、どうしていいのかわからないまま、毎日必死でサンドイッチと、格闘しているのです。

『このレタス使おうかなあ、あっ！ こっちのにしようかなあ』

「ヨータンもっと急いで、お客様待ってるのよ」

もたもたしているヨータンのおかげで、ハニーの胃袋もキリキリしているらしく、今日のハニーは、ときどき手で胃のあたりを押さえています。

オカーさんも、いつまでたってもしょうずにならないヨータンに、いらいらしているようです。

そんな雰囲気を知っているヨータンなのですが、あせればあせるほど、うまくできないし、

ゆっくりやると注意されるし、ヨータンはどうしていいのかわからないのです。

(何をやらせてもだめな子)

(もたもたしている、のろい子)

またまたヨータンの頭に、昔言われたことばがわいてきました。

『ちがう、ちがう』

ヨータンはそのことばを打ち消します。

『我即神也 我即神也』

『オカーさんは、ヨータンに意地悪しているのかもしれない』

『ちがうよ、オカーさんはこの店には、意地悪な人はいないって言ってたよ』

『それは、オカーさんが、自分の意地悪をごまかすための言い訳なのかもしれないよ』

『そんなことないよ、ヨータンはオカーさんの言ったことばを信じるよ』

そんな問答が頭をかけ巡っていたとき、

「ヨータン、サンドイッチのパンがなくなったから切ってきて」

と、ハニーがいました。

「はい」

と、ヨータンはこたえて、サンドイッチの作業台のそばに置いてある箱から、おおきい長い食パンをかかえて、マルタさんが忙しく働いているテーブルへ行きました。

パン工場には、畳1帖程の大きなテーブルが2つ、工場の真ん中に向かい合わせに並んでいます。そして、その横にもう一つ同じくらいのテーブルがあって、その前にいつもオトーさんがいます。

オトーさんはいつも、そのテーブルに背を向けて、パンを焼いている釜の中をのぞいているのです。そして、焼きあがったパンは、大きな鉄板ごと、オトーさんの後ろのテーブルの上に乗せられます。

パンはアツアツのときは、さわる事ができません。

それは熱いからではありません。

焼けたばかりのパンは、とても柔らかくて、さわると、ペしゃんとへこんでしまうのです。

なのでアツアツの焼けたばかりのパンは、少しさめるまで、そのままテーブルの上に置いておくのです。

そして少しさめたら、隣のテーブルに鉄板を移動して、マルタさんが、 tong でつまんで手早く四角いおぼんに並べていきます。

少しさめたといっても、鉄板はまだまだアツアツです。

油断をすると、やけどをしてしまいます。

マルタさんはじょうずに、お盆の上にパンを並べていって、

そのおぼんは、そのままお店に並べられるのです。

マルタさんが、パンをおぼんに乗せているその後ろに、長細いテーブルが壁にくっついて置か

れています。

そのテーブルの上に、食パンをいろんな厚さにカットできる、スライサーが置いてあるのです。

ヨータンは、スライサーにパンを置くと、サンドイッチの厚さにメモリを合わせました。

すると、マルタさんが心配そうに声をかけました。

「ヨータンだいじょうぶ？ ちゃんとできる？」

「だいじょうぶです。」

ヨータンは元気に応えました。

ヨータンは、機械にはちょっと自信があるのです。

でも、のっぽのノッピーも、ふっくらポックーも、マルタさんのテーブルの向こう側のテーブルで、パンの生地をこねながら心配そうにチラチラ見えています。

ノムノムさんは、ヨータンの隣にいて、パンの上にお砂糖シロップをかけるのにいっしょうけんめいです。

ヨータンがパンをカットしている間に、オカーさんが何かぶつぶつ言いながら、ヨータンの仕事場所で、何かをやっていました。

ヨータンはその事を気にもしないで、食パンのカットに集中していました。

ヨータンは、パンのカットからもどると、ハニーにパンをぜんぶ渡しました。

ハニーは、ヨータンに4枚だけパンをわたして、

「卵とツナのサンドをつくってちょうだい」

といいました。

「はい」

と、こたえたヨータンは、苦手なツナのサンドを、先に作ろうと思いました。

パンにカラシマーガリンをぬって、次はレタス、と思ってレタスに手をのばしたヨータンはびっくりして、手が止まりました。

なんと、ヨータンのレタスボールの中に入っていた、きれいな黄緑色のレタスが、いつのまにか緑色のかたいレタスに変わっていたのです。

さっき、オカーさんが、この作業場で何かをやっていたのは、この事だったのです。

ヨータンの仕事が、なかなかじょうずにならなくて、イライラしたオカーさんは、他の不安が重なり合って、とんでもないことをしてしまったのです。

『こんなことをして、困るのはオカーさんのほうなのに』

かたいレタスのサンドイッチを買ったお客さんは、どう思うでしょうか。

でも、ヨータンはだまってかたいレタスを使いはじめました。

この状態に、さすがのハニーは、ヨータンを気の毒に思ったのでしょうか。

ヨータンの作ったサンドイッチが横にパタンと倒れると、ハニーがヨータンに小声で言いました。

「わたしに貸して。直してあげる」

「すみません」

ヨータンがサンドイッチの袋を渡すと、ハニーは素早く袋を開けて直してくれました。

「ヨータン、パンの切り方へんじゃない。パンの大きさ、右と左と違うわよ」

ハニーは、ヨータンのパンをさわって、どうして倒れるのか原因がわかったみたいです。

『それにしても、どうしてオカーさんは、こんなことをしたのでしょうか。』

『オカーさんは、いじわる?』

『いいえ、ちがうよ』

ヨータンは、オカーさんが、いじわるには思えないのです。

だって、オカーさんからは、いじわるな波動が感じられないのです。

『オカーさん、きっとこれがいじわるなことって、知らないでやったんだ』

『だったらオカーさんは、悪くないよね』

『業がオカーさんを、そうさせただけなんだ』

『だって、昌美先生がこんなこと言ってたよ。』

「ばかやろう、こんちくしょうは私が言っているのではありません。

業が言わせているのです。」って。（2002年5月の大行事で業の言葉を吐き出したとき）

『だったら、業が消えればみんな神様なんだよね』

『人類即神也 人類即神也』

『オカーさんも神様。業が消えればみんな神様。人類即神也』

ヨータンは、それからはときどき、こんな唱えかたをするようになりました。

『業が消えればみんな神様。人類即神也』

小さなパン屋さん

第3話

ヨータンと守護霊様 (捨てる神と拾う神)

町の通りのかどっこに、ちいさなパン屋さんがありました。

この小さなパン屋さんには、10人の神様がおいしいパンを作っていました。

でも、みんなは自分が神様だということを知らないのです。

ただひとり、おっちょこちょいでドジなヨータンだけが、そのことを知っているのです。

ヨータンは、きょうも朝からオカーさんにおこごとを言われて、ちょっと落ち込んでいます
毎日毎日

「レタスが、・・・・・・・・」

「卵が、・・・・・・・・」

「ツナが、・・・・・・・・・・・・・・・・」

と言われて、毎日

『人類即神也』と、

『我即神也』と、

『パンさんありがとう』に

明け暮れて元気になっているのですが、どうしたことか、きょうはちょっと心が沈みがちなのです。

『ヨータン、お仕事選ぶの間違えたかな』

『ほんとうは違うお仕事があったのかもしれない』

『でもどんなお仕事があったかな』

『ヨータン、前のお仕事辞めないほうが良かったのかな』

『違うよ。前のお仕事はどう考えてみても続けることはできなかったよ』

『続けることができないと言うことは、守護霊様が次のお仕事へ行きなさいって、おっしゃっているんだよね』。

『ということは、次のお仕事が、決まってるはずなんだよね』。

ヨータンは、バスが通っていない地域へ、自家用車でお仕事に行っていたのです。

でも、事故にあって、自家用車が動かなくなってしまいました。

それで、お仕事に通えなくなってしまったのです。

だれも信じてくれないかもしれないけど、ヨータンはそこではとても期待されていたのです。

お給料も毎年上げてもらって、ヨータンのお給料はトップレベルだったのです。

ヨータンが、次のお仕事を探そうとしていたとき、いつもパンを買いに来ているこの店に寄って、張り紙を見つけたのです。

それは入口に貼ってあった「お仕事してくれる人募集」の張り紙でした。

ヨータンは飛びつきました。

だって、おいしいパンを毎日売ることができるのです。

『お客様に喜んでもらえるお仕事だもの、ヨータンやりたい。』

とってしまったのです。

『やっぱりここしかなかったんだ』。

ここまで考えて、ヨータンはやっぱりここしかなかったと納得しました。

『守護霊様はここで、何をさせようとしているのかな』

『ヨータンはここで、何か役に立つことがあるのかな』

落ち込んでいるヨータンには、これ以上のことはわかりませんでした。

ただ、わかっているのは、ここでの勉強が、将来のヨータンにとって、とても大切なことだということなのです。

ヨータンは、守護霊様が大好きです。

とても信頼しています。

それは、守護霊様には、わがままが言えるからです。

ヨータンは、どうしてもなくなったら、守護霊様にだだをこねます。

いつもではないよ。

ほんとうに、どうしてもなくなったらです。

守護霊様は、いつもヨータンを見守っていて、そしてヨータンをととても大切に思っていて、ヨータンが成長するのをとても喜んでくれるのです。

ヨータンは、守護霊様にだだをこねたおかげで、そのことを知ったのです。

だから、困ったときや悩んだときには、必ず守護霊様に話しかけるのです。

『守護霊様どうしよう、どうしたらいいかな』って。

そうしたら、必ずヒントがもらえるのです。

守護霊様がそばにいないな、と感じて『守護霊様、守護霊様』って何度でも呼んだ時期もありま

した。

でも、今はいつもいっしょです。

それは、毎日『世界人類が平和でありますように』って祈って、『我即神也、人類即神也』をとなえているからです。

祈っているときは、いつも守護霊様といっしょだということを、ヨータンはながらの祈りで会得していたのです。

ヨータンは、小さなパン屋さんでがんばることに決めました。

守護霊様がいっしょだからやっていけます。

守護霊様が喜んでくれるように、やるぞー!

つづく

小さなパン屋さん

第4話

ヨータンとおふろ

「はー きもちいい」

ヨータンは、おふろが大好きです。

毎日お風呂に入ります。

湯船につかって体を伸ばすと・・・。

おっと、ヨータンのおうちのお風呂は小さくて、体を伸ばせません。

湯船につかって足をまげると・・・。

とにかく、きもちいいのです。

一日の疲れが、ほーっと抜けていくようで・・・。

なんとも、ほーっ、なのです。

「マルタさん、どうしてそんなに早くお仕事ができるの？」

「年季が入っているからよ。だれでも最初から早くできる人なんかいないよ」

「ポックーそのパンみんな自分で食べるの？」

「みんなにそう言われるけど、これは家族のぶんだよ」

「そうだよねえ」

「冷蔵庫開けます」

「あっ、ノッピーごめんなさい、じゃましてたわね」

「ノムノムさんおっしゃれー、毎日お洋服変えてくるの？」

「そうじゃないわ、いつもこんな感じよ ふっふっ」

一日あったことが、走馬灯のように浮かんでいきます。

『わたしもいつか、みんなのように、じょうずにテキパキとお仕事できるようになるかな』

『オカーさんに、おこごと言われなくなる日が来るのかなー』

「お店で倒れているの、ヨータンの作ったサンドじゃない」

「このレタスの入れ方、ヨータンよね」

「ヨータン、倒れたら、ハニーに直してもらって」

ほーっとしたヨータンの頭の中から、一日のできごとがふわーっとうかんできました。

『おっと、いけない、いけない』

さて、体を洗いますか。

ヨータンは、毎日お風呂で最後のリフレッシュをします。

ヨータンは、スポンジにせっけんを付けて始めました

『うでさん、ありがとうございます』

『のどさん、ありがとうございます』

『声たいさん、ありがとうございます』

『気管支さん、ありがとうございます』

ヨータンは、のどが弱いので、のどは、特にていねいに感謝します。

『肺さん、ありがとうございます』

『心臓さん、ありがとうございます』

『胃さん、ありがとうございます』

『大腸さん、小腸さん、盲腸さん、ありがとうございます』

『腎臓さん、肝臓さん、ありがとうございます』

『その他の内臓さん、ありがとうございます』

『足さん、ありがとうございます』

『骨さん、ありがとうございます』

『血液さん、ありがとうございます』

体全部にせっけんのあわが行き渡りました。

つぎは、シャワーで流します。

『肉体の全ての働きさん、ありがとうございます』

『肉体の全ての機能さん、ありがとうございます』

『肉体の全ての機関さん、ありがとうございます』

『肉体の全ての細胞さん、ありがとうございます』

『肉体さん、ありがとうございます』

きれいになりました。

心のモヤモヤも、きれいになりました。

これで、ぐっすりねむれます。

「いやー 気持ちよかったー。」

みなさん、おやすみなさい。

小さなパン屋さん

第5話

お店のお仕事

町の通りのかどっこに小さなパン屋さんがありました。

このパン屋さんには、10人の神様がおいしいパンをつくっていました。

じつは、みんなは自分が神様だということを知らないのです。

ただひとり、おっちょこちょいでドジなヨータンだけが、そのことを知っているのです。

ヨータンは、小さなパン屋さんへ来てもう2か月になりました。

でも、サンドイッチ作りはまだまだで、今日もサンドを袋に入れようとする時、

「あっ」

パンの間にはさまっているレタスが1枚、ポロリと落ちてしまいました。

ヨータンが困った顔をすると

「そんな小さなかけらは、ほっといていいのよ」

ハニーが小さな声で教えてくれました。

ヨータンは、レタスの入れ方がまだじょうずではありません。

だから、包丁で切ったときにレタスのかけらがポロリと落ちるのです。

卵サンドを作っていると、

「ヨータン、チーズはさむの忘れてるよ」

ハニーがまた教えてくれました。

この頃は、ハニーがいろいろ声をかけてくれるのです。

ヤッシーは、どうやったらきれいに盛り付けできるのか教えてくれます。

『ハニーもヤッシーも、自分の仕事をしながらヨータンの仕事を見る余裕があるのね、すごいなあ』

ヨータンは、自分のすることにせいっぱい。

自分の作ったサンドイッチをながめる余裕もありません。

『でも、いつかきっと、そんな余裕が持てるようになるよ、きっと』と、

ヨータンは、思っているのです。

「ヨータン、きょうはお店を手伝ってちょうだい」

サンドイッチ作りが終わると、オカーさんが言いました。

「はい」

ヨータンは、『待ってました』

と心の中で思いました。

お店に出てみたいとヨータンは何度も思っていたのです。

なぜかって？

ヨータンは、お客様に、「ありがとうございます」って言うのがとっても好きなのです。

お客様が、選んだパンをお盆にのせて、レジにやってきます。

小さなパン屋さんのパンは、焼きたてのパンがそのまま並んでいます。

だから、パンは袋に入っていないのです。

だから、レジでパンを1個ずつ、袋に入れてあげるのです。

でも、やわらかいパンを袋に入れるのは、なかなかむずかしくて。

袋がうまく開かないとパンを入れるのに時間がかかってしまいます。

パンの値段も、まだ全ぶ覚えていないヨータンは、やっぱりもたもたしてしまいました。

『このお店でヨータンにできること何かないかなあ』

ヨータンはそう思いながらお盆をふいたり、パンをはさむトングをふいたりしていました。

お店でお仕事をしているヨシエさんは、ヨータンより少し先輩なのですが、てきぱきしていて、

まだわからないことは、オカーさんが親切に教えていました。

きょうは、ヨシエさんはおうちの用事で早引けするのです。

それで、ヨータンはピンチヒッターになりました。

「ヨータン帰りが遅くなるけどいいかなあ」

オカーさんは、ヨータンに頼むのはとても心配そうに聞きました。

「だいじょうぶです」

ヨータンは元気に答えました。

『これぐらいしなきゃ』

『お店の約に立たなくちゃ』

ヨータンは、何か自分にできることはないかなと思いながら、お客様がいない合間に、ジュースの入ったケースやカウンターをふいていました。

おや、パンが並んでいる台の上がパンくずやお砂糖で汚れています。

お店のパンがたくさん売れて、もう半分になってしまったので、開いている台の上の汚れが目

立ってきたのです。

『ふかなくちゃ』

ヨータンは、布巾でふき始めました。

『あれっ! この台の上なかなかきれいにならないよ』

パンくずや砂糖くずはなくなったのですが、何か汚れている感じです。

『焼き立てパンの脂分が飛んだのかもしれないな』。

そう思ったヨータンは、洗剤を少し布巾に含ませてふいてみました。

台の上は、見る間につるつるピカピカになっていきました。

『これ、おもしろーい』

ヨータンは、お客様のいない合間をぬって、台のお掃除をしていきました。

ヨータンは知らなかったのですが、オトーさんとオカーさんは作業場の窓からそれを見ていたのです。

次の日、きょうもヨータンは、

『人類即神也』と、

唱えながら、小さなパン屋さんへお仕事にやってきました。

『きょうもパンさんありがとう、がんばるぞ』

と、ちょっとから元気の入った気合を入れて、サンドイッチ作りを始めました。

そこへ、オカーさんが声をかけました。

「ヨータン、サンドが倒れたら、ハニーに直してもらってね」

『んっ! きょうのオカーさん、なんかやさしい!』

つづく

ちいさなパン屋さん

第6話

倉庫のおしごと

町の通りのかどっこに、小さなパン屋さんがありました。

この小さなパン屋さんには、10人の神様がおいしいパンを作っていました。

でも、だれもじぶんが神様だということを知らないのです。

ただひとり、おっちょこちょいでドジなヨータンだけが、そのことを知っているのです。

「ヨータン、今日は倉庫に積んである、パンを入れる箱をふいてくれるかな」

ひと仕事終わったヨータンに、オトーさんが声をかけました。

「はい」

ヨータンは、元気な声で返事をしながら倉庫へ行きました。

15畳ほどの倉庫には大きな棚があって、パンを作るのに使う小麦粉の大きな袋とか、大豆とか、いろいろな材料が大きな箱とか小さな箱に入って、ぎょうぎよく並んでいます。

ひんやりとしたその倉庫の真中に、ヨータンの頭より高くパンを入れる箱が積んでありました。

この箱は、他のお店からの注文のパンを、入れて運ぶための箱です。

倉庫には、ヨータンのほかにだれもいません。

ヨータンは、ひとりっきりで、ここのお仕事をします。

ヨータンは、『やったー！ ラッキー！ ヨータンこのお仕事大好き』

とおもわず思いました。

だってこの倉庫には、だれもいなくて、ヨータンひとりだけなんだもん。

『ああ お祈りいっぱいできる』。

『うれしー!』

ヨータンは、布きんを用意すると

『よーし きれいにするぞ』

と、心に気合をかけてはじめました。

『せかいーじんるいがーへいわでありますようにー 人類即神也』

『せかいーじんるいがーへいわでありますようにー 人類即神也』

じつは、ヨータンはこんな雑用が大好きなのです。

だーれもいなくて、ひとりっきりで、平和の波動を、思う存分回りに放射できるからです。

ヨータンの持った布きんは、きゅっきゅっと調子いい音を出して、箱の外側をきれいにしています。

ひとつ終わったら、隣に置いて、また平和の祈りをしながら、ふいていきました。

ひんやりとした倉庫なのですが、ヨータンはうっすらと、気持ちいい汗をかいています。

そして、きれいになった箱が高く積み上がってきた頃に、オトーさんがやってきました。

「おや、外側をふいていたのか、中だけでよかったんだけどなあ」

「しょうがない、ヨータン、中もふいてちょうだい」

オトーさんは、もう仕事が終わった頃かと思って見に来たのでした。

「はい」

ヨータンは、返事をして、今度は箱の中をふきはじめました。

ふきながらヨータンは思いました。

『なんだ、箱の外はふかなくてもよかったのか、オトーさん残念そうだったなあ、でも外側汚れていたもの』。

『お客様は、きれいな箱のほうが、うれしいと思うんだけどなあ。』

でも、きっとオカーさんは、なんにも言わなくても喜んでくれるよ。

だって、オカーさんきれい好きだもの』。

そう思うとヨータンは、また元気にはじめました。

『人類即神也 せかいーじんるいがーへいわでありますようにー』

『人類即神也 せかいーじんるいがーへいわでありますようにー』

その日くらい、ヨータンには、こんな声がかかるようになりました。

「ヨータン、その仕事終わったら、倉庫にあるパンの箱ふいてちょうだい」。

するとヨータンは元気にこう答えるのです。

「はーい」

そして心の中でこう叫ぶのです。

『やったー!』